

書 評

『マイ・グリーンスクール ―幸せを目指すブータンの学校』
(タクル・S・ポーデル著 / 細田満和子訳 星槎大学出版会)

坂 田 映 子

はじめに

著者のタクル・S・ポーデル氏が本著の執筆に至る社会的・文化的背景を知っておきたい。

ブータンでは、1976年に第4代国王がGNH (Gross National Happiness、国民総幸福) を提唱して以来、GNHの国づくりの中心理念に4つの柱を掲げた。そのGNHを支える4つの柱は、「1. 公正で持続可能な社会経済発展、2. 自然環境の保全、3. 伝統文化の振興、4. 良い統治である」(タクル, 2018, pp.18-20) と述べている。(以下の文中で項のみの記載は、『マイ・グリーンスクール』の引用項を示す。)

政府の役割は、GNHの条件づくりを満たすことであり、2008年の初の総選挙で発足した政権が最初に手掛けた大きな仕事の一つが教育改革であった。2009年12月、政府主催でGNH教育を推進するための大きな会議が首都ティンブーで開かれた。この時、観想教育・ホリスティック教育・先住民教育、エコロジー教育、批判的思考を柱にした改革案が話し合われている。本会議に出席していたのが当時の教育大臣のタクル・S・ポーデル氏、前ロイヤル・ティンブー・カレッジ学長である。その後、タクル氏により「グリーンブータンのためのグリーンスクール」(p.22) プログラムが考案され、『マイ・グリーンスクール』にまとめられている。

1. 「マイ・グリーンスクール」教育プログラム

『マイ・グリーンスクール』は、膨大な哲学的知識を駆使しながら、現実問題としてのブータンの教育をどう変容させるか、その考え方と戦略を指南した啓蒙書のようなものである。教育内容は「8つの領域」(p.16) からなる。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| (1) 自然においてグリーンであること | (2) 社会的にグリーンであること |
| (3) 文化的にグリーンであること | (4) 知的にグリーンであること |
| (5) 学術的にグリーンであること | (6) 美的にグリーンであること |
| (7) 精神的・霊的にグリーンであること | (8) 道徳的にグリーンであること |

「8つの領域」は、「教育を受ける側の生得的、知的、学究的、社会的、文化的、精神的、感覚的、道徳的要素を開花させ、社会に役立つ優れた能力や人格を備えた人材に養成」(p.22)

としているが、必ずしもこの順番に展開するものではなく、むしろ、学びに応じてこれらが複雑に作用していくものと考えられる。

特徴的な領域としては、ホリスティック教育といわれる「命を潤すための沈思黙考の時間」(p.82)があり、人間のスピリチュアルな発達を促す実践として重きがおかれている。「8つの領域」の学び方は、生徒に問題を命題として示し、質疑応答、問答、振り返りなどの弁証法的アプローチを採用している。具体的な指導内容・方法・学習評価については言及されていないため、いわゆるハウツーを本書から得ることはできないが、振り返りによって、生徒の論理や直感力、想像力などが引き出され、協働的思考が形成されていくことがわかる。

2. 教育の変容の可能性

著者は、『マイ・グリーンスクール』を実施する「ワンモの学校」(pp.98-112)の学校評価を行っている。素晴らしい教育実績を挙げながらも反社会的行動による生徒退学者の問題、課外活動の多さから授業時間数減を引き起こしている課題、保護者のクレームなどを真摯に考察し、そういった問題を持ちながらも「ひとつの学校がこれほど多く前向きなエネルギーと善意を生み出し、前進していけるのなら、私たちが力を合わせれば、この国を真の楽園にできるはずだ」(p.114)と結んでいる。それほどまでに明言する「8つの領域」の学びには、生徒や保護者はいずれグリーンな方向へ変容できるという信念が窺える。教育内容に、精神的・霊的な要素を含みこんでいる限り、生徒指導上の諸問題など、自身を超越した大いなる存在の助けにより、解決に導かれていくことを示唆している。

3. わが国への示唆

わが国の学習指導要領にも、常にジェネラルな教育理念があり、各教科・領域はそれに従属しているのが一般的である。わが国は、教科学習・汎用的能力・横断的扱いにおいて「生きる力」が貫かれている。この「生きる力」と「グリーンであること」は符合する。人間のあらゆる側面における成長に有意義な役割を担うコンセンサスとして考えれば、わが国の「道徳科」やヒドゥン・カリキュラム、心の動きによる非認知能力がそれにあたるといえよう。

わが国の場合、憲法が国民に基本的人権を永久の権利として保障しているが、市民感覚では、幸福は個人の問題であり主観的なものととらえられている場合が多い。そういった中で、星槎は、いち早く『マイ・グリーンスクール』の良さを認め、学園全体の理念に切り結んだことは、星槎の心である「共育」に合致したからではないのだろうか。

新型コロナウイルスが世界的に蔓延し、災禍を被っている現状では、ポストコロナ時代の教育の再考に、自らの国の心の拠り所を作り上げることが求められている。命を原点とした本著の癒しを得て、新たな教育改革に突き進む勇気を得ることができるかもしれない。

おわりに

本稿では、「書評」というより「書籍紹介」という意味合いが強くなった。『マイ・グリーンスクール』は、批判的記述より啓蒙的な記述の方が、わかりやすいのではないかと考え、あえてそのようにさせていただいた。

本著が日本向けに翻訳されるにあたっては、星槎グループ創始者・会長の宮澤保夫氏をはじめとする多くの教職員、翻訳にあたられた星槎大学副学長細田満和子氏の熱意によるものであり、心からの敬意を表したい。

今後、行き先不透明な 21 世紀を生き抜く上で、学ぶ側に育む資質・能力、自己変容における主要な道について、本著の教育プログラムがどのような変遷を遂げていくのか、ブータン・星槎のそれぞれのその動向について目を離すことはできないだろう。